〔特別寄稿〕

加曽利貝塚博物館に望む

鈴　木　正　夫

I

昭和40年、千葉市は、前年度に購入した桜木町所在の加曽利貝塚周辺の地を貝塚公園に整備し、その一角に、講堂、図書室、収蔵庫および陳列室より成る博物館を建設したが、その千葉市加曽利貝塚博物館は、昭和41年11月に開館された。これは、まさにわれわれが多年にわたり夢みつづけ、抱きつづけた仰望が実現せられたものである。

そもそも千葉県は、昔からいまに至る間、常に人文に栄えた土地であった。日本列島の最東地点より半島を遠く西南に向け、豊熟と生々に満ちて流れ上る黒潮をあたかも迎えるごとく張り出した、この房総の地は気候温和、土地肥豊、たしかに多くの人間を育成してきた。その天然と地勢の与件は、まだ農耕の恵みに浴さなかった縄文時代にも妥当したに違いなく、日本全国の貝塚の２割以上が千葉県に存在する。ことに、その大型の典型たる馬蹄形貝塚に至っては、全国のものの半ばが千葉県に存在し、そのまた半数以上が千葉市に存在するのである。このように千葉市は貝塚、ことに馬蹄形貝塚の宝庫とも称すべき土地である。

かくのごとくして、千葉市に存在する馬蹄形貝塚のうち、とくに大きく、しかも２個が相並んでメガネのように横たわっているのが加曽利貝塚である。また、本貝塚は明治年間より多くの学者によって研究、発掘され、ことに大正年間の本格的研究により、「加曽利Ｂ式」、「加曽利Ｅ式」なる土器の典型が発見され、土器型式による縄文時代編年の確立とともに、考古学上不動の地位を保つ標準遺跡として、加曽利貝塚の名が永久に残ることになった。この重大なる考古学上の遺跡であって、しかも全国に比類稀なる連立の大馬蹄形貝塚には、われわれ地元の者として、どうしても目を注がざるをえなかったのであった。

II

一方、千葉市はこの十数年このかた、京葉工業地帯の造成と関連し、かつは大東京の周辺都市として、異常の躍進的発展と膨張をとげ、市内各地に土地利用の攻勢著しく、埋蔵文化財の破壊滅失の危険がいよいよ急迫するに至った。そこで、別文にみられるごとく、われわれは「加曽利貝塚を守る会」を結成し、百方手をつくして奔走、尽力した結果、千葉市長をはじめとする市当局の了解と好意を受けることができ、また国と県との補助のもとに、加曽利貝塚公園と同博物館を施設することができた。

さらに、加曽利南貝塚については、工場敷地となっている関係上その緊急調査のため、千葉市は国と県とから補助金を仰ぐとともに、日本考古学協会に調査を依頼した。それに従って、協会は加曽利貝塚調査特別委員会を設立し、昭和39年より２カ年にわたって、日本全国の各大学、各研究所の考古学者を動員し、南貝塚全域を６本のトレンチにて詳細な観察をおこなった。その結果については、その調査報告が近く公刊される予定である。結局、南貝塚も保存が必要であるということになり、市は国と県との助力のもとに、目下その地を所有している会社と折衝し、代替地を提供して、その全域を買収すべく交渉中である。かくて数年後には、この南貝塚の地も、やがては貝塚公園のうちに包含されることになるであろう。

かくて、千葉市、千葉県、国（文部省文化財保護委員会）および日本考古学協会各員のご好意、ご熱意による協力のもとに、加曽利貝塚は南北を含めて、ここに貝塚公園として永久に保存され、また、その調査・研究による遺物や成果は、加曽利貝塚博物館内に収蔵、展示されて、天下万民の所有のもとに、今後の学者、学徒の文化向上に資することとなったのは、ことに地元のわれわれのこの上ない歓びである。

III

しかし、現在における博物館の状況ならびに活動は、まだほんの最初の段階であり、最少の段階である。それは、現在においてもいかに拡張されるべきであるか、さらにまた将来においていかに拡大されるべきであるか。それらの期待、希望を逐次述べておきたい。

まず現在における期待、希望を述べるに、現在における展示物の大部分は他よりの借物である。また現在における野外展観施設も未完成である。これらはもちろん、現在収蔵中もしくは研究室で整備中の本貝塚出土の土器や石器の整備を待って、相次いで展示されるべきであることはいうまでもない。また野外展観施設も、一両年中には完成されるであろう。しかし、この保存事業も、わが国現時の研究状態そのものが、まだ試験的段階にあるにすぎないので、その成功的完成を祈ることはもとより切であるが、たとえこの度の試みが十全的の成功をみなくても、さらに今後の研究、実験の集積により、一層の進展や成功のため、長期にわたり継続して行ってもらいたい。

博物館の施設および人員については、その十分な拡充を市当局に望まざるをえない。すでに先般、日刊新聞紙上に、開館後年余を経たばかりの当博物館に対する種々の非難を読んだ。差当って観覧者の安易のためにも、また展示物の安全のためにも、全館の暖冷房をぜひ計画して欲しい。また、説明のためのテープ拡声装置、もしくはオーデオ装置等の設備などを考慮して欲しい。

とくに、職員の定員増大はぜひお願いしたい。ことに博物館の専門職員である学芸員の増加である。これから述べる将来における加曽利貝塚博物館に対する期待ないし希望の実現のためには、必然的に職員数の増大、ことに学芸員のそれが必要だからである。

Ⅳ

千葉市加曽利貝塚博物館は、まず「加曽利貝塚」の博物館であらねばならない。このためには、博物館は加曽利貝塚（北ならびに南貝塚）の既得の遺物のできるかぎり多くを収蔵あるいは管理し、必要に応じてそれらを出陳する。貝塚現地における既掘ならびに未掘の遺跡を監視ないし管理をし、貝塚博物館ならびに貝塚公園を、もっともその目的にそうように整備し、活用する。

さらに、必要に応じては、それぞれの目的に従って、同貝塚について一定の研究、発掘などを許可し、総括する。また図書室には、加曽利貝塚に関する既刊の単行本、研究報告、論文その他、あらゆる関係文献を可能なかぎり収集、またはコピー収録して、研究者の便益に供する。博物館みづからも研究報告するとともに、今後加曽利貝塚に関して発刊されるあらゆる印刷物は、これを収集整理して前述と同様の目的に供する。その他加曽利貝塚の遺跡自体と、その出土品については、その施設の整備の完成、整理の促進、保全管理など常に万般の注意を加えつづけるべきである。

次に、この博物館は同時にまた、「貝塚の博物館」であらねばならない。日本全国には、今日でも多数の遺跡博物館があるけれども、冒頭に述べたごとく、千葉市は日本全国における貝塚の宝庫である。したがって、その千葉市にあり、しかも日本最大の規模を誇る代表的な貝塚にあるこの貝塚博物館は、日本全国の貝塚に対する博物館であらねばならず、日本における貝塚研究のメッカであらねばならない。

よって、本博物館の図書室には、千葉県をはじめ関東一円、さらに日本全国の貝塚に関する図書、研究発表等を縦覧することのできる収集をもたねばならない。また本博物館においては、強大な研究体制をもち、まず本貝塚以外の千葉市内の貝塚、さらに全県下の貝塚に対する研究を十分にし、また日本全国の貝塚についてもその現状を把握し、あるいは必要な研究をおこない、常にその知識を新たにして、それらの研究機関と絶えず緊密な連絡のうちにあって、日本における貝塚研究の中心であらねばならない。

これらの要望を満たすためには、その施設の規模においても、必要経費においても、専門職員たる学芸員の数においても、本貝塚博物館は大いに拡充強化されねばならない。しかし、発展に膨張にと歩武を進める大千葉市は、必ずやこの博物館の施設、予算、定員における拡大を見過ごすことはないであろうことを確信する。さもなくば、この貝塚博物館を有する地元のわれわれの誇りは、転じて天下の恥となるのである。

（千葉市加曽利貝塚博物館協議会・委員長
千葉大学医学部名誉教授・生理学）